

文春文庫

こちら殺人現場ですが

山村美紗



文藝春秋



文春文庫

246—7

こちら殺人現場ですが

定価はカバーに
表示してあります

1987年9月10日 第1刷

1987年12月30日 第2刷

著 者 山村美紗

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-724607-4

文 春 文 庫

こちら殺人現場ですが

山 村 美 紗



文 藝 春 秋

推理短篇集『こちら殺人現場ですが』目次

猿を抱いた少女

獣医殺人事件

真紅のマニキュア

愛の罠

三通の遺言状

消えた脅迫者

こちら殺人現場ですが

解説 郷原 宏

276 227 177 133 107 73 47 7

推理短篇集

こちら殺人現場ですが

猿を抱いた少女

1

それは、最初赤ん坊の泣き声のように聞こえた。

京都の清水寺きよみづでらに近いマンションの横で、ローラースケートをしていた二人の子供が、顔を見合わせた。

「なんか声がしたなあ？」

「中庭のほうやろ？」

「誰かが赤ん坊捨てたんとちがうか」

以前に捨て子のあったマンションである。

二人の子供は、勢いよく足で地面を蹴って中庭のほうへ滑り出した。

ひな祭りが過ぎて、若草の萌え出した中庭には、白い柵さくがしてあって中へ入れない。柵によ

りかかって中庭をのぞいた子供達は、

「あつ、人が！」

「死んでる」

と、同時に叫んだ。

白いセーターにスカートの少女が、横むきに倒れ、口から赤い血が流れていた。異様な鳴き声は、その腕のところからしている。

よく見ると、それは猿だった。少女がしっかりと猿を抱いて死んでいるのだった。猿もどこか怪我をしているらしく、鳴き声は、けたたましくなったり、急に弱くなったりした。

子供たちは、とんで帰って親に知らせ、すぐに、パトカーや救急車が呼ばれた。

京都府警の狩矢警部は現場に到着すると、まず、死体のそばの地面を注意深く眺めた。

きれいに掃き清められた地面には、足跡一つなかった。死体だけが、柔らかい土にめり込むように横たわっている。

「へ墜死だろうな。死体の足には靴がなく、泥もついてない」

狩矢は、そう呟いて上を見上げた。真上あたりの六階のベランダの手すりに、赤いスカートのようなものがひっかかり、ガラス戸が開いて、カーテンがひらひらしている。

「キーンッ」

突然、鋭い鳴き声がした。警部はいそいで死体のそばにかがみ込んだ。猿が、死体の腕の中から這い出そうとしているのだが、脚に少女の体がかぶさっているのだから出ることができないのだ。

警部は、少女の体を少しずらして、猿を出した。猿は、よろよろと歩いて警部のそばへ来ると、うずくまった。

「とにかく検死だ。誰か猿を預ってくれ」

警部はそう言つて杉田警部補に猿を渡すと、検死官と一緒に死体のそばに立った。

「外傷はありませんね。口腔にも異常はありません」

検死官は、手早く外表所見を見ていく。

口腔内が鮮紅色である、青酸カリや農薬を飲んだ毒死の疑いがあるし、反対に蒼白だと、トリカブトなどの毒を嚥下した疑いがあるのだが異常はなかった。

「頭部を強打してますね。それから、肋骨が折れて肺に突き刺さっているようです。口からの出血はそのためでしょう。……やはりこれは墜死ですな」

検死官の所見も警部のカンと一致した。

「どのくらいの高さからだと思えますか？」

「三階より下だったらこれだけ土にめり込むこともないし、肋骨も折れないでしょう。まあ、五階か六階くらいですか。即死ですからね」

狩矢警部はうなずいて、もう一度六階のテラスを見上げた。

2

死者の身元はすぐにわかった。

思ったとおり、ガラス戸の開いていた六階の611号の住人で、矢代夕子といい、四国から出て来て浪人中の十九歳の予備校生だった。

背が一メートル五十五センチとやや小柄でほっそりしていることから死体は年齢より三、四歳若く見えた。

「このマンションに一人で住んでたんですか？」

狩矢が、蒼ざめた中年の管理人に聞くと、管理人は、「そうどす」とうなずいてから、

「女の子が浪人するのもええ加減なもんどすなあ。家族と一緒にならともかく、一人で住んで……やっぱり淋しかったんどすやろ。近ごろは、猿と一緒に住んでましたわ」

と、ため息をついた。

「猿？ あ、抱かれていた猿だね」

「ええ。ほんとはこんなマンションでは、動物は飼うたらあかんのどすけど、大学に受かるまではとて黙認してました。手くせの悪い猿やいうて隣り近所から苦情が出てましたけどな」

管理人は、そう言つて慚然とした顔をした。

「なんでまた、飛び降りたりしはったんどすやろ。やっぱり入学試験がでけへんかったんですやろか？」

今日は、三月五日である。狩矢警部の息子も四日、五日と国立大学の入試を受けて、帰ってきているはずだった。

「可愛がつっていた猿を抱きしめて飛び降りていることから、やはりこれは自殺でしような」

部下の刑事が、警部の顔を見た。

「さあ、浪人中だというし、試験が終った日だから、それも多分に考えられるな。とにかく、彼女の部屋へ行ってみよう」

何人かの刑事や管理人と一緒に、警部は、六階へかけ上がった。いった。

六階の611号室の前に行くと、ドアはカギがかかっていた。

「このドアのカギは、オート錠ですか？」

「え？」

「つまり、外からカギで閉めないで、カギがかからないドアですか、それとも、ぱたんと閉めると自然にカギがかかるドアですか？」

管理人は、自分の管理しているカギで、ドアを開けながら、

「ああ、そのことです。外からこうしてカギをかけんと閉まらんだアですわ。オート錠とかいうのにすると、カギを持って出るのを忘れた人が、開けてくれというてきて面倒なんで、このマンションのオーナーが、この錠にしてくれはったんです」

と言った。

2DKの部屋は、きちんと片付けられ、本箱の上には、チューリップと雪柳を入れた花瓶がおいてあった。

しかし、覚悟の自殺をしたというふうでもなく机の上には、本やノートや単語帳などがひろげられていたし、キッチンには、フライパンに焼飯ができ上がっていた。

狩矢警部は、かがんで机の横にあった小さな布の手さげをとりあげた。中には、定期入れと参考書が二冊、それに筆箱と弁当の空箱が入っていた。定期入れをとりあげると、京都大学の受験票が入っていた。

「やっぱり、今日、京都大学を受けたんですね。その手さげは、今日受験に行くとき持っていたものですね？」

橋口部長刑事が、横から口をはさんだ。バスの定期券の駅名は、有名なK予備校前になっていたし、定期券をはさんだ裏には、K予備校の身分証明書も入っていた。

「K予備校へ通っていたのか……」

せっかく一年予備校通いをして、その結果も見ずに死んだ少女が哀れだった。狩矢の息子も、希望の大学へ進めなかったら、K予備校へ行くといっている。

「しかし、昨日と今日は京大へ受験に行ったはずだ。予備校と京大は、方角が違うから、定期では行けない、どっちにしても財布がいると思うんだが、財布はどうしたんだろう。帰ってから買い物にでも行ったのかな？」

狩矢があたりを見廻していると、橋口が、

「財布は、死体のスカートのポケットに入っていました。たしか、小川警部補が保管しておられます」

と言った。

狩矢は、ベランダに出て、下を見下ろし、大きな声で、小川警部補に、財布を持って上がる

ように言った。

六階から下を見下ろすと、パトカーや救急車が平たく見え、警官たちが動いているのが人形のように小さく見えた。一瞬目がくらみそうになり、狩矢は、あわてて黒い手すりをつかんだ。七十センチぐらいの高さの鉄パイプで作られた手すりには、赤いスカーフが引っかかっているだけで、争ったような跡も、傷もなかった。

狩矢が、スカーフをとって調べていると、太った小川警部補が、手に赤い財布を持ち、息をはずませて上がってきた。

「これですが、中には三千五百円と小銭が少し、それに、カギが一個入っています」

小川は、指紋をつけないために手袋をはめた手で、財布をはさむようにして渡した。

「カギというと、このドアのカギかな？」

狩矢警部が、ドアのところへ行って試すと、確かにそれは、部屋のカギだった。

狩矢は管理人に向かって聞いた。

「管理人さん、この部屋のカギは何個あるの？」

「みんなで三つで、二つを入居者の方にお渡しし、私が一つお預りしています。最近、マスタ・キーいうのを作りませんよってね」

矢代夕子の机の引き出しを開けてみると、もう一つのカギがきちんと入っていた。

「カギが二つともあるのに、ドアにカギがかかっていたということは、つまり自殺ということですかね。突き落した犯人がいたとしたら、突き落したあとドアを開けて外へ逃げ、カギをか